

I. 『あり松の・・・』（梅屋 鶴壽 祇園寺前）



あり松の  
柳しぼりの  
見世にこそ  
しはしと人の  
立ちとまりけれ

梅屋 鶴壽

①作者 梅屋 鶴壽(うめや かくじゅ、1801～1864)

幕末の狂歌師。享和元年（1801年）江戸神田佐久間町に生まれる。姓は諸田、通称は始め佐吉、後、亦兵衛と称した。秣（まぐさ）を商い、尾州家の御用を務める。

若い頃から狂歌を得意とし、初めは長屋姉子、または松枝鶴壽とも号したが、後に長谷川町に待合茶亭、梅の屋を出し、梅屋鶴壽というようになった。狂歌人物誌に「花街戯場のことをよくうがちて秀吟おほし。本町側糸巻連の魁首にして其名四方に鳴る。」とある。老後には号を秣翁とも言うようになった。

元治元年（1864年）享年63歳で亡くなる。（元治2年の説もある）

辞世吟

つまづくが 最後この世に いとまごひ

ひまゆく駒の おくり狼

② 設置のいきさつ

平成20年（2008年）有松開村四百年を祝し、桶狭間幕山の高津修市氏が緑ライオンズクラブの協力により7月に建立。

歌の選択について、高津氏は有松の文化の香りを少しでも高めようとこの歌を選んだそうです。